



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	冒険遊び場づくり活動のオルタナティブな学びの場としての可能性
Author(s)	野島, 智司; Satoshi NOJIMA
Citation	社会教育研究, 24, 55-67
Issue Date	2006-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28566
Type	departmental bulletin paper
File Information	24_P55-67.pdf



冒険遊び場づくり活動のオルタナティブな 学びの場としての可能性

野 島 智 司

1. はじめに

今日の子どもを取り巻く状況は厳しい。都市化によって多くの自然環境が失われるとともに、競争社会化が進行している。その過程で、社会は子どもの遊びによる学びと学校教育による学びを分離し、前者を排除してきた。一般に遊びに必要とされる「時間」「空間」「仲間」の3つの「間」は、都市化や競争社会化、それに伴う孤立化によって失われ、今や子どもの遊びの場はメディア環境に追いやられてしまっている。大人社会の要請としての「(学校)教育」による学びと、子どもの遊びによる学びとが分離したことで、子どもは競争社会に勝ち残らなければならないという思いと内発的な欲求とが葛藤し、そのなかで自己を形成しなければならないという困難に直面する。その葛藤はつまり、子どもの意思である遊びを中心とした学びと、大人の意図である「教育」を中心とした学びとの間の矛盾に起因する。その困難を言語化できない子どもはしばしばそれを身体化させるし、遊びの衰退によって失われた学びが「教育」によってカバーできないとすれば自己形成そのものに困難が生じる。そのことは、今日のいじめや不登校、「普通の子」による少年犯罪など、様々な形で社会問題化していることから明らかである。

そのような二項対立は、言わば学校教育における子ども中心主義と大人中心主義の対立として幾度も問われてきたことではある。しかし、その議論の陰で着実に子どもの遊びの場は失われ、皮肉にもそのために新たな「教育」の必要性が提起され、子どもの学び全体が矛盾を抱えた学校教育によって翻弄されてしまう傾向には一向に歯止めがかからない。したがってそこでは、遊びによる学びと「教育」による学びとの矛盾を克服したオルタナティブな学びの場を、現代の社会状況に即していかにして構築できるかが喫緊の課題として問われなければならない。

本報告では、このような子どもの抱える矛盾を克服するオルタナティブな学びの場の条件について検討し、その可能性を市民参加による公園再整備を契機に組織化された旭山公園キッズの冒険遊び場づくり活動を事例に探ることとする。

2. 遊びから展開される教育実践の課題

上記のような問題意識から、本論におけるオルタナティブな学びとは、「教育」によって分離され、

排除されてきた遊びによる学びを基軸にするものである。しかし、ただ単に遊びを重視した教育実践は、一方で危険を孕んでいる。子どもの遊びから展開して大人の意図的な「教育」へとつなげる実践は、学校教育でも生活科や総合的な学習の時間などで展開されている。ここでは、そのような教育実践の一例として環境教育の実践を取り上げよう。

環境教育は環境問題の克服のための主体を形成するという大人側の明確な意図を持った実践である一方、その基盤としての自然体験が重視されることで子どもの主体的な遊びの重要性が認識されている。鈴木敏正(2001)は、子どもの遊びから出発し、学校から地域へと展開する環境教育実践を取り上げ、それらを「単に自然や環境の理解にとどまらず、『行為的』『協同的』そして『公共的』な理性形成にかかわる地域創造教育として展開する環境教育の可能性を示している」と評価する。つまり、自然と関わる遊びから展開された学びには、単に環境を対象化して理解するというだけでなく、大人社会である地域のあり方そのものを子どもの視点から変えていく可能性があると言うことができる。

しかし、そのような意義を持つ環境教育実践には課題もある。特に、環境教育実践においては、その学びの場が地域に根付き自己展開していくこと、すなわち次世代への「伝承」が保障されていない。それは子どもの環境教育実践の多くが学校から展開される実践であったり、あるいはマニュアル化された実践であったり、非日常的なイベントであったりすることに起因する。環境教育における学びのプロセスそのものは確かに重要な意義をもつものかもしれないが、その学びのプロセスが自然な形で次世代へ「伝承」されていくことを保障できなければ、それは常に大人側の「教育」による意図的な関与を必要としてしまう。非日常的なイベントやマニュアル化されたものであればそれが保障できないことは当然であるし、学校教育におけるそれは、子どもの遊びからの学びそのものを大人が管理、あるいは方向付けしてしまう危険をも孕んでいる。加えて、権威的な教師-生徒関係のなかでは、子どもは教師の意図を先取りし、それに従う努力をしてしまう。そこでは一見すると子どもは「主体的」かもしれないが、学びの目的は明らかに異なり、本質的な矛盾は解決されないままである。これらのような問題が生じるのは教師の資質によるものではなく、むしろ矛盾を抱えた学校教育の構造上の特性と言った方が良いだろう。また、清水美智子(1996)が指摘するように、「大人の意図と手順が明確な遊びの方が、実践記録として発表しやすく、指導の成果として評価しやすく」、「研究者もまた分析しやすく論文になりやすい」ことにも十分留意しなければならない。

以上のような問題は何か環境教育実践に限ったことではないだろう。学校教育全般、さらには学校外にも広く当てはまる問題である。例えば根津明子(1991)は、子どもの遊び場としてのチルドレンズ・ミュージアムを論ずる中で、博物館が「これまでは学校教育の弊害を破るために、学校外に子どもの活動の場を求めながら、実際には従来の学校教育の型を学外に拡大するという結果になっていることが多い」と指摘する。

したがって、オルタナティブな学びを考える際には、単に遊びに着目するというだけではなく、遊びの「伝承」¹という過程にこそ着目しなければならないのである。

3. 遊びの「伝承」論への着目の意義

遊び（による学び、そしてその展開プロセス）が自然に次世代へと自己展開すること、すなわち遊びの「伝承」に注目することの意義は、上記のような大人の意図的な「教育」の関与を逃れることにある。しかしそれは、先の矛盾の統一を拒むものではない。

小川博久（1991）は、遊びの「伝承」における「教授（instruction）」を、「近代学校における教授活動（teaching）というものとは区別すべきであ」とし、「伝承」を「意図的ではあるが計画的でない働きかけ」であるとする。そこでは、未熟者に技量の高い年長者の遊びへの「あこがれ」という象徴的学習目標が存在し、「自分と年齢が近く、遊びの技量も真似しやすいモデルとしての子ども」が具体的学習目標として存在するような重層的な異年齢集団が、生活集団として存在していることが必要だという。さらに小川（1987）は、「遊び集団の重層性に基づく伝承性の成立は、徒弟制における教育の成立と深い関連性がある」とし、「この集団規範は、それより大きな社会の諸規範とも共通性があるので、この規範の習得は一仕事人としてだけではなく、社会人としての人間形成の過程ともいえる」とも述べる。そこにはジーン・レイヴ&エティエンヌ・ウェンガー（1993）の正統的周辺参加論や、環境教育の文脈で言えばロジャー・ハート（2000）の「子どもの参画」論に通底する論理がある。レイヴ&ウェンガーによれば、それは「新参者の側のたんなる学習過程をはるかに越えたもの」であり、「人と実践との間の互惠の関係」なのである。

したがって、遊びの「伝承」という概念は、大人社会との接点を考え合わせることで、そこで必然的に社会を模倣するだけでなく、新たな社会を構築する可能性をも持つ。よって、この遊びの「伝承」の概念には、先の矛盾を統一する論理が含まれているといえるのではないだろうか。

またこれは、イヴァン・イリッチ（1977）が脱学校論で主張した学習ネットワークの構想とも重なる。イリッチの学習ネットワークでは、事物、模範、仲間、年長者が重要な学習資源とされていたが、これらはどれも、遊びの「伝承」が成立する上での重要な要素でもある。さらに、それらを社会参加の過程として捉える観点は、ただそれらの学習資源が開かれて存在しているということだけでなく、学習資源とされる大人の社会のあり方についての考察を迫るものでもある。接点として位置づく大人社会が権威主義的であれば、子どもは「あこがれ」を抱けないであろうし、画一的な価値観を持った社会であれば、多くの子どもにとって閉鎖的なものになってしまう。したがって、

¹ここでの「伝承」とは、剣玉・メンコなどのいわゆる「伝承遊び」の世代間伝達に限定される概念ではない。小川（1991）によれば、「伝承」とは「文化が世代間で伝わっていく働きについての概念であ」とし、それを教育論として論ずるには「個人レベルの人間同士の文化伝達の仕組みのレベルに置き換えて解釈する必要に迫られる」としている。

その社会はおそらく、多様な価値観を持った大人によって開かれた形での労働がなされていなければならぬだろう。

4. 冒険遊び場づくり活動の可能性と課題

では、いかにしてそのような場は実際に保障できるのだろうか。そもそも遊びの「伝承」に必要とされる異年齢集団そのものが衰退しているのが現状である。

そこで、遊びの「伝承」を保障する取り組みとして注目されるのが、「冒険遊び場(プレイパーク)」の実践である。NPO法人日本冒険遊び場づくり協会(2004)によれば、冒険遊び場は1943年にデンマークで生まれた「廃材遊び場」を起源とする。日本では1975年に世田谷区内の住民による取り組みとして最初の「冒険遊び場」が作られ、現在では協会が把握しているだけで全国186もの冒険遊び場活動グループが存在している。冒険遊び場づくり活動は、「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーにした「乳幼児から小中高、大学生、学校に行っていない子も、それから親も、親でない大人も、高齢者も(中略)それぞれの人がそれぞれの時間を自分の責任で自由に遊び過ごせる場を「作り続ける活動」と考えられている。

その理念には筆者も大いに期待するところであるが、そこにも課題はある。高橋健介(2001)は、冒険遊び場において子どもの自由な遊びを保障していく役割を担う大人「プレイリーダー」の存在に着目し、「国分寺プレイ・ステーション」のプレイリーダーの行動記録と学童保育所の指導員の記録を比較・検討している。しかし、両者の記録に子どもへの関わり方に明確な差は見られず、プレイリーダーは「子どもの自由な活動をできるだけ、干渉しない形でかかわろうとしながらも、安全とか、規則遵守というところでは、決定権を発揮しようとし、(中略)小学校の教師のように知らない遊びは教えずには分からないという立場と、遊びは自主的活動だから見守るべきだという立場の対立の図式、つまり遊びに対する従来の定型化が見られる」として、プレイリーダーの実践場面での活動に疑問を投げかけている。そして、小川の「伝承」遊びの研究に触れ、「大人の労働における作業行為はしばしば、子どもの憧れであった」とし、「この憧れが、遊び活動を創出する動機を生み出す」という点に着目することが求められるとしている。

この高橋の指摘は重要である。確かに冒険遊び場の意義は大きいものがあるし、異年齢集団が崩壊している現代では、プレイリーダーの存在が不可欠である。しかし、プレイリーダーという遊びの支援に特化した存在では、遊びから大人社会へと展開される学びのプロセスを保障できず、子どもは常に先の矛盾を抱え続けなければならないのである。したがって、先述のように、そこでは遊びを支援するためというよりも、労働する大人(あるいは遊ぶ年長者)に対して「あこがれ」を持つ機会としての大人との接点が必要となる。これは小川(2001)が「観察学習が生起するためには、大人のモデル行動が自然に行使され、そこに子どもたちの自由な活動の場も隣接していて、結果と

して観察学習が成立するような状況を人工的に環境として再構成しなければならない」とするゆえんである。現代的な労働の場を子どもに対して開くことは現実的とはいえないが、少なくとも、子どもの遊び場との接点に大人が自身の持つ専門性を発揮できるような場を作らなければならないだろう。

ところで、そのことに関連して、子どもにとって一人や少人数の遊びにも固有の意義がある点を忘れずにおきたい。特に、今日の子どもの困難を抱えている現状を踏まえると、社会の喧騒からの逃げ場として、そのことは重要である。冒険遊び場に不可欠とされる自然環境、特に生物的環境は、非言語の応答性を持つ存在として子どもにとって重要な存在と考えられるし、また、非言語の表現行為として工作・描画などの芸術的活動も重要である。しかし、そのような遊びをする子どもは、大人の目からはしばしば「遊び方を知らない子ども」に映ってしまう。このことも、大人の関わり方を変えることによって改善され得る問題であろう。

ただし、高橋の報告はプレイリーダの行動記録のみの分析に限定されていた。冒険遊び場づくり活動の特色は、プレイリーダに限らない多様な地域住民が遊び場づくりに関わっている点にあるし、それら地域住民の子どもに対する関わり方を分析することが、冒険遊び場づくり活動にオルタナティブな学びの場としての可能性を見出すことにつながるだろう。実際国分寺プレイ・ステーションにおいても、NPO法人国分寺冒険遊び場の会で活動する加賀谷真由美（2001）によれば陶芸好きの大人たちの陶芸クラブや、野菜作りを楽しむ畑クラブなどが組織化されており、「大人たちの姿に刺激され、傍らで子どもたちもチャレンジするという光景はよく見かけ」と述べている。

これらを踏まえ、次節からは、札幌市の市民参加による旭山記念公園再整備事業を契機として誕生した「旭山公園キッズ」の活動の展開に着目して、その場の持つオルタナティブな学びの場としての可能性を、子どもの遊びに対する大人の関わり方を確認しながら検討する。

5. 旭山公園キッズの活動の展開

5-1. 旭山公園キッズ発足の経緯

旭山公園キッズは、札幌市の旭山記念公園再整備事業を契機として誕生した。旭山記念公園は札幌市の中心市街地と藻岩山・円山の森林地域との境界に位置する、札幌オリンピックにあわせて整備された大規模な都市公園である。開設30年を経過し、施設の老朽化などから、2001年に札幌市によって再整備がなされることとなり、そこでは当初から市民参加の公園作りが意図され、市民の協同的活動を基盤とした市民参加がなされてきた。

旭山記念公園再整備事業は、札幌市のプロポーザル方式による選考により、コンサルタント業務を高野ランドスケープ・プランニング株式会社（以下、TLP）が担っている。ここでは札幌市の要望として市民参加型の再整備が意図され、TLPは一企業としても「市民参加型社会を作ってい

きたい」という理想を持って事業を行っている。TLPは机上でのシンポジウムやワークショップだけでなく、現場でのワークショップを意図的・計画的に実行し、市民の議論展開を牽引する役割を担ってきた。市民参加に関するTLPの具体的な取り組みの概要を表1に示す。そこでは、「世論の形成」が意図され、活動的な市民に対する積極的な働きかけや、専門家や他の市民団体とのネットワーキング、技術的な支援など、様々な形で市民団体の組織化が促された。そこで2001年に最初に組織化された市民団体が、子どもの自由な遊び場づくりを目指した旭山公園キッズである。旭山公園キッズの初代表を務めたSさんは、発足時の様子を次のように語っている。

この(第1回)シンポジウムの後に、ワークショップが18回くらいあったんですよ、1年間で。ワークショップの何回かのうちの1回で、「この公園でどんなことしたい?」とか、そういう問いかけがあって、「子どもがあんまり遊んでないし、子どもが遊べる公園にしたいよね」とか。

一番最初、これの6月くらいかな。Aさんと一緒に公園の中をグルッと回る体験会みたいなのがあって、それに参加したんですよ。それはすごく面白くて、こんな、なんか普通の公園、一見普通にあそこの遊歩道歩いて、何も感じなくて帰っていくじゃないですか。グルッと。だけど実際そういう人と一緒に歩いたら、ほんとに葉っぱの裏に卵があるよとか、この葉っぱはこれで1枚の葉っぱなんだよとかね、ニセアカシアとかね、色んな食痕とか、見せてもらったら、すごい、こんなに知らないこともたくさんあるし、知ったらそういうことがすごい新鮮で、ほんとその体験がすごく印象的で、だったらこういうことを、こういう公園でね、日常的にやってくれる人がいたり、子どもたちも参加できたりしたら楽しいんじゃないのって。

旭山は割合こう、藻岩山とか、円山に接してて、自然度の高い公園じゃないですか。だから、せっかくそういう場所のある公園なんだから、そういう整備の仕方をしてほしいなっていうことで、子どもと一緒にやりたいですっていう風に言ったら、「夏休みの子どもワークショップっていうのやりませんか?」って言って、高野ランドスケープから私の方に電話がかかってきて。で、「じゃあ、ぜひやりましょう」って言って。で、私の友達のお母さんたち何人かに、Oさんとか、Hさんとか、Kさんとか、あの辺に声をかけて、「もう1週間公園で何しても良いって言うてるから、遊ぼうよ」って。それはHのお子さんたちのことだけど、うちのクラスの子が、たぶん10何人いて、あとその兄弟とか、うん、そんな感じで、わーっと一週間、色んなことをしたんです。で、やったら、やっぱりすごい楽しいし、じゃあこれをなんとか、続けていけたらいいよねって。で、それがさらに、再整備にフィードバックされていったら面白いからっていうんで、(旭山公園キッズの活動を)始めました。

ここからは、市民参加による公園再整備のためのワークショップでの問いかけから議論が展開し、

実際の現場での印象的な体験につながり、それが旭山公園キッズの組織化につながっていく様子が読み取れる。そしてその活動は初代代表のSさん自身の印象的な体験に基づいており、「遊ぶうよ」という姿勢につながっている。

次節からは、「夏の冒険遊び場」を例に、旭山公園キッズの実際の活動場面における大人の関わり方について検討する。

5-2. 旭山公園キッズの活動

旭山公園キッズは2002年の発足以後、子どもの遊びや自然との関わりを中心に活動を展開しており、2004年度には日本冒険遊び場づくり協会からの助成も受けている。現在の主な活動内容を表2に示す。初代代表のSさんは2004年に代表を退き、現在はOさんが代表を担っている。スタッフと

表1. 旭山記念公園再整備事業2001～2004年度における市民参加に関するTLPの主な取り組み

年度	主な取り組み	
2001年度	自然観察会(秋・冬) ニューズレター発行開始(vol.1)	
2002年度	共有期	第1回シンポジウム
	展開期	12回のワークショップ 屋内でのワークショップ、現地での活動を繰り返し、整備プランを考える →3つの案に集約
	計画案策定期	第2回シンポジウム
	合意形成期	6回のワークショップ 1案に集約 再整備の方針の発表 第3回シンポジウム
2003年度	森のプレワークショップ 森のワークショップ1～2 デザインワークショップ1～5 森林と市民を結ぶ全国の集い 記念植樹検討ワークショップ 駐車場管理地域説明会 冬の自然観察会	
2004年度	管理運営ワークショップ1～4 森のワークショップ1～3 地元意見交換会 第4回シンポジウム デザインワークショップ1～3	

表2. 2005年度旭山公園キッズの主な活動内容

日程	活動内容
5月15日(日)	野鳥観察会
6月5日(日)	木に名札をつけよう! ～この木何の木～
6月26日(日)	森の探検隊
7月23日(土)	夏の冒険遊び場
8月7日(日)	きのご観察会
9月10日(土)	星空観察会
10月1日(土) 2日(日)	森のフェスティバル (複数団体と合同)
10月23日(日)	稚樹の引越し大作戦
11月13日(日)	ゴミ拾い大作戦
12月23日(金)	クリスマス雪遊び
1月21日(土)	スノーキャンドル&雪中泊
2月19日(日)	冬の森観察会&かんじき ウォーク
3月21日(火)	シラカバ樹液観察会

参加者は明確に区分されておらず、ボランティア保険に加入している15名ほどの母親、父親、学生、行政職員などが中心に活動している。旭山公園キッズは他の市民グループとも連携しながら活動を展開しているが、ここではまず旭山公園キッズ独自の活動として2005年7月に行われた「夏の冒険遊び場」の活動を具体例として述べ、次に他団体との連携による活動について触れたい。

① 旭山公園キッズ独自の活動 —2005年「夏の冒険遊び場」を例に一

「夏の冒険遊び場」は、旭山公園キッズの中心的活動として毎年恒例のイベントである。当日は大人・子ども合わせて約50人の参加があった。子どもは幼児から小学校高学年までの年齢層で、大人はその母親を中心に、父親、筆者を含む近隣大学・専門学校の学生や、同公園で活動する他団体のメンバー等も参加した。旭山公園キッズの活動に初めて参加する親子の姿もあった。この日の企画は、「チョークでアート」（広場をチョークで落書きし、後で洗って原状回復する）、「ドラム缶風呂」、「ドリームキャッチャー作り」、「ジャム作り」、「焼きマシュマロ」、「ダンボール遊び」などであった。企画そのものを子どもたちが行っていたわけではないが、それらは昨年経験して楽しかったこと、大人側でやってみたいと考えたことが中心であり、それぞれ同時並行的に行われた。

「夏の冒険遊び場」終了後、代表のOさんは旭山公園キッズのメーリングリスト上で、次のように書き込んでいる。

当日はお天気に恵まれ、なんと50人を越える参加者がありました。

チョークでアート : 展望広場が子供たちの絵で一杯になりました いたずら書きて楽しい!!

ついに出了! ドラム缶風呂!! : Aパパ、Bパパはこのために来たのかと思えるほどの熱中ぶりでした。

おやつのコロの火を虫眼鏡で起こそうと粘る人、虫を取りに行く子ども、バーニングペンに熱中する女の子、ドリームキャッチャー作りに夢中なママたち、ひたすら木を切る子ども(何ゆえ?), 蔓を求めて森に入るおとな……気がつけば大人も子どもものんびりと好きなことをしながら遊んで時間が過ぎていったような気がします。

初めて参加して「何をすればいいの……?」と困惑していた女の子二人組はいつのまにかダンボールで巨大キャタピラをつくり芝生の坂を転がって「きゃあ~!!!」

そうそう、芝生の坂がダンボールで滑るのにうってつけのすべり台と化しこれもまた楽しかったね~

ここからは、大人も子どもも同じ空間の中でそれぞれが夢中になれることを見つけ、思う存分熱

中していた様子が伺える。とりわけ、子どもたちは大人側の意図を超えて遊んでいることがわかるだろう。「何をすればいいの……？」という言わば「遊び方を知らない」子どもたちも、特に教わるでもなく、大人の意図しない遊びを展開していた。また、「ドラム缶風呂」という企画によって父親の積極的な参加も実現されている。

また、単に一人ひとりが個別バラバラに好きな遊びに熱中していただけない。ある子どもがルピナス(マメ科の植物)の実がたくさん実っていることを発見したことをきっかけに、「この豆は何?」という疑問が生まれ、大人に尋ね回ったり、それに気づいた子どもたちがいつのまにかグループでルピナスの実を取り、夢中で中の種を集め始めたりもしていた。そして、最後の場面では、描いたチョークを洗い流した後に子どもたちが全員で輪になってボール遊びを始める姿も見られた。初参加の子どもたちがいるのにも関わらず、このような状況が見られたのは、ここにいる子どもたちの間で共感的な関係が形成されていたからといえるだろう。また、同じ空間を共有している大人と子どももまたバラバラだったわけではなく、子どもたちが中心の遊びの中にも大人が混ざり、大人たちが中心の遊びの中にも子どもが混ざっていた。

この前の月には環境教育リーダーによる自然観察会が行われていたのだが、その時にはプログラム上の制約で行けなかった場所へ虫取りに「行こうよ」という子どもたちの姿も見られた。そのような姿勢は、遊びの展開が方向付けられていないからこそ実現できたものだろう。

ここでは、旭山公園キッズでの子どもの遊びが大人の意図を超えて展開されていることがわかった。それらの背景には、参加者間の共感的な関係性の形成があり、そこには大人側の遊ぼう、楽しもうとする姿勢が重要な役割を果たしていたといえるだろう。

② 他団体との連携による活動

もうひとつ、旭山公園キッズの活動の特色として、他団体との連携による活動がある。

旭山公園キッズ同様、市民参加による公園再整備を契機に別の2つの市民グループが組織化されている。ひとつは自然と人との関わりを広げることを目指した「旭山森と人の会」、もうひとつはきのこの調査観察活動と環境保全を目指した「藻岩山きこの観察会」である。それらもまたTLPの支援を受けながら組織化され、3団体が相互に協力しながら活動を展開している。3団体にはメンバーの重なりもある。現在ではそれら3団体が共同で「旭山記念公園市民活動協議会」を組織し、市民の手で公園の管理運営を担うことを目指し取り組んでいる。

旭山森と人の会のメンバーは男性が多く、野鳥に詳しいMさんが代表を務め、森林科学を専門とする大学教員や、行政職員、コンサルタント職員、大学生などが会員となっている。その活動としては、自然観察から森林整備、自然環境調査、勉強会など、自然と人との関わりを重視しており、やや専門的な活動もある。また、かんじきを履いての自然観察(かんじきウォーク)や、シラカバ樹液観察会、野鳥観察会などは、旭山公園キッズと共催であり、子どもたちの参加がある。藻岩山

きのご観察会は、中高年の年齢層を中心に活動を展開し、キノコや樹木に関する観察・分類等の活動を行っている。毎年8月の「家族できのご観察会」は旭山公園キッズと協力し、子どもたちもきのこの観察に参加している。

これら2団体の活動は、大人の主体的な活動であり、それぞれの専門性が色濃く発揮される内容である。旭山公園キッズと比較すると専門的でやや定型的な活動ともいえる。しかし、メンバーが旭山公園キッズの行事に参加したり、あるいは旭山公園キッズの子どもたちが他団体の活動に参加したりすることで、そこに独自の意義が生まれてきている。例えば、先の「夏の冒険遊び場」において見られた「ひたすら木を切る子ども」の姿は、旭山森と人の会の協力を抜きには説明できないものだろう。他団体メンバーの旭山公園キッズへの参加があることは、森林やきのこのに関心を持つ子どもが新たに学びを展開する自由を保障することになる。また逆に、子どもが旭山公園キッズの自由な遊びの中でそれらについて関心を抱いたときに、他団体の活動に参加することで深めていける可能性もある。つまり、旭山公園キッズの活動との関わりによって、学びの質が相互に影響し合いながら深まっていると考えられる。

また、2005年末に組織化された3団体が合同で公園の管理運営を担うための旭山記念公園市民活動協議会の活動は、そこでの学びの展開に新たな可能性を付与している。旭山公園キッズの「木に名札をつけよう！」の活動を始め、花壇作りや、市民活動の拠点として整備された「森の活動拠点」の薪ストーブ利用に向けての薪割りなどは、公園の管理運営に向けての活動であるが、それは公園を労働の場、生活の場として子どもたちと共有する活動ともいえる。今後の活動の展開によって、その学びの場としての可能性は大きく広がるだろう。

以上から、他団体との連携による活動によって、冒険遊び場活動だけでは発揮され得なかった専門性が発揮され、労働の場を子どもたちに開くことになり、冒険遊び場活動と連携することで子どもたちのさらなる学びや遊びの展開が保障されていたといえるだろう。

6. 旭山公園キッズのオルタナティブな学びの場としての可能性

以上から、旭山公園キッズにおける大人の関わり方には、次のような特徴が確認された。第1に、大人自身がそれぞれ夢中になれることを見つけ、楽しんでいたということである。これは、子どもたちの遊びの展開を制約せずに、子どもたちの「あこがれ」や「モデル」となるために必要な条件である。第2に、大人側の楽しみの中心は、物作り、食、環境活動など、公園という場を生活や労働の場として利用する活動であった。これは、子どもたちの社会参加の過程を保障する営みとしての意義を持つだろう。加えてそれらの活動が他団体との連携によってより多様なものになっていたことも指摘しておきたい。そして第3に、それらの大人側の活動のきっかけとして、机上での議論の場、現場での印象的な体験の機会が、市民参加による公園再整備を契機に保障されていた。この

ような行政やコンサルタントの市民に対する関わり方が、旭山公園キッズを始め、旭山記念公園に関わる活動の全体を形作るきっかけとなっていたのである。

そして、このような大人の関わり方のもとでの子どもたちの活動は、遊びの「伝承」に基づくオルタナティブな学びの場としての可能性を十分に示していた。第1に、異年齢の子どもたちの集団において共感的な関係が形成されていた。これは、「夏の冒険遊び場」のなかでの遊びの展開において確認された。このような共感的な関係は、遊びの「伝承」がなされる上でもっとも基本的な条件である。第2に、異年齢の子どもたちの遊びは相互に影響し合いながら遊びを展開していた。これもまた、「夏の冒険遊び場」における遊びの展開において確認できた。これは観察学習の「モデル」に相当するものがあったといえるだろう。第3に、子どもたちの遊びは、大人の遊びや労働に影響を受けていた。「ひたすら木を切る子ども」の存在がそれを象徴しているといえるだろう。これは遊びの「伝承」における「あこがれ」や「モデル」に相当する。そして第4に、自由な遊びの展開が保障されることによって、より専門性が高く、定型的な学びの場さえも新たな意味を持つことになった。このことは、定型的な学びの質を転換する旭山公園キッズの活動の持つ可能性を意味している。つまりは、学校教育における学習内容さえも、旭山公園キッズの活動によってその質が転換され得るということも考えられる。

以上のように、市民参加による公園作りから始まった冒険遊び場づくり活動は、子どもにとってのオルタナティブな学びの場を形成することにつながっていた。この場合のオルタナティブな学びの場は、子どもが学校に行く行かないに関わらず利用できる、真の意味でオルタナティブな教育の場を意味する。現在、不登校に対する認識は深まってきているとは言え、学校に行かないことに対する社会的な圧力は未だ強いものがある。そしていわゆるオルタナティブ・スクールは、子どもたちが学校教育の矛盾を抱えきれなくなって初めて選択されることが多いし、そもそもそれを選択する以前に問題が深刻化してしまう恐れがある。したがって、このようなオルタナティブな学びの場が開かれた形で存在していることは、学校教育による矛盾が深刻化するより前に子どもの自己形成を確かなものにし、行く行かないを含めて学校での学びの意味付けを子ども自身で再構築することにつながるだろう。また、現在ある学校やオルタナティブ・スクールのあり方を考える上でも、旭山公園キッズにおける子どもたちの学び、大人の関わり方、そして旭山記念公園再整備事業に見られた行政やコンサルタントの市民参加に対する姿勢は、示唆を与えるものになるのではないだろうか。

7. おわりに

最後に、本論で明らかにできなかった課題を述べたい。

まず、本論では一人ひとりの大人や子どもの学びのプロセスを分析するまでには至らなかった。

旭山公園キッズの活動は日常的な活動とはなっておらず、子どもの主体的な参加という意味では課題もある。しかし、中心的なメンバーは準備も含めて定期的に活動することで、そこでの遊びの展開はなされていると考えられるし、家族で参加し、体験を共有することによって、そこでの経験を日常生活に持ち帰ることも可能になると思われる。それが発展していけば、子ども自身で企画を作り出したり、公園作りに提案を行ったりすることも可能になるだろう。それを確かめるためには、個人に即した学習過程の分析が欠かせない。また、子どもたちにとって旭山公園キッズでの学びが学校教育での学びとどのように関係しているかを確かめるためにも、そのことは重要である。

また、行政やコンサルタントとの関わりや、他団体との連携、特に公園の管理運営を共同で担うことに関しては、旭山公園キッズを始め各主体が財政面を中心にそれぞれ実践的な課題にも直面している。本論ではその部分の詳細な分析までは行っていない。そのような課題の克服は、上記のような大人の関わり方を保障するための条件整備を考える上で避けて通れない。ここでの市民活動が、資金集めのための事業体と化したり、あるいは逆に資金不足で縮小されてしまったりしては、この場の有する大きな可能性も発揮されないままになってしまう。旭山記念公園再整備事業における市民の試行錯誤の経験は、今後の市民参加の公園作り、さらには新たな学びの場作りに活かされるべきものだろう。

そして、このような詳細な分析を重ねることによって、遊びの「伝承」論自体の新たな展開も可能になるだろう。本論ではそこまで言及できなかった。

一方、今回は冒険遊び場づくり活動、さらには市民参加による公園作りの持つ、オルタナティブな学びの場としての可能性と、そこでの大人の関わり方の特徴を明らかにすることができた。子どもの遊びが失われている現代において、その意義は大きいといえるだろう。一般に子どもの遊びを支援することは特別な力量を必要とすると考えられ、子どもの遊び場作りへの参加には躊躇する大人も多い。それは冒険遊び場作りの団体、市民参加の公園作りを目指す行政・コンサルタント、それぞれがもつ共通の課題でもある。しかし、何より大人自身が遊び、学び、楽しみ、汗を流すことが、それだけで子どもの遊びの支援として優れた方法になると考える。本論や今後のさらなる研究の展開が、それらの場作りのための一助となれば幸いである。

引用文献

- イヴァン・イリッチ, 1977.『脱学校の社会』(東洋・小澤周三訳) 東京創元社.
小川博久, 1987.「伝承遊びにおける集団構造の特色—構造の重層性」『第40回日本保育学会論文集』.
小川博久, 1991.「遊びの伝承と実態」『新・児童心理学講座 第11巻 子どもの遊びと生活』(無藤隆責任編集) 金子書房.
小川博久, 2001.「われわれ大人は子どもの遊びにどうかかわりうるか」『「遊び」の探求』(小川博久編著) 生活ジャーナル.
加賀谷真由美, 2001.『子どもとつくる遊び場とまち—遊び心がキーワード—』 萌文社.

- 清水美智子, 1996. 「遊びと学習—発達と教育における遊びの意義」『遊びの発達学 展開編』(高橋たまきはか編著) 培風館.
- ジーン・レイヴ, エティエンヌ・ウェンガー, 1993. 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』(佐伯 胖訳) 産業図書.
- 鈴木敏正ほか, 2001. 『叢書 地域をつくる学びⅤ 環境保全から地域創造へ—霧多布湿原の町で—』北樹出版.
- 高橋健介, 2001. 「冒険遊び場における遊びの学習と大人の役割—異年齢集団における遊びの学習との比較を通して—」『「遊び」の探求』(小川博久編著) 生活ジャーナル.
- 特定非営利活動法人 日本冒険遊び場づくり協会, 2004. 『はじめよう! パートナリシップで冒険遊び場づくり』.
- 根津明子, 1991. 「チルドレンズ・ミュージアムにおける環境設定と遊び体験」『「遊び」の探求』(小川博久編著) 生活ジャーナル.
- ロジャー・ハート, 2000. 『子どもの参画—コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』(木下勇ほか監修, 奥田陸子ほか訳) 萌文社.